

20. 骨髓性増殖疾患における骨髓シンチ (第一報)

前田 尚利	松下 照雄	柴田登志也
山下 敬司	浜中大三郎	小鳥 輝男
石井 靖		(福井医大・放)
堂前 尚親	津谷 寛	吉村 輝夫
		(同・一内)
真野 和夫		(同・二内)

骨髓増殖性疾患は、多赤血球血症、多血小板血症、白血病に大別されるがその病態の評価および予後の推定は困難である。真性多血症2例、真性多血小板血症1例、白血球1例、真性多血症ブスルファン投与による骨髓癆をきたした1例の塩化インジウムによる骨髓シンチグラムの所見を得た。真性多血症2例では、右上腕骨、右大腿骨右膝関節周囲に左右非対称的に強い集積があり、残る1例では対称性に上腕骨大腿骨にRI集積を認めた。真性多血小板血症の1例では強い赤血球減少があるにもかかわらず大腿骨全体にわたり左右対称的に異常集積を認めた。一方白血病では体全体の骨に異常集積を見た。ブスルファン投与による再生不良性貧血では骨盤骨にもRI集積をわずかに認めるものの、血液検査ではまだ正常化していなかった。症例数は少ないが、症例を重ねることにより病態および予後と、塩化インジウムによる骨髓シンチとの相関をあきらかにすることが可能と思われた。

21. 特発性血小板減少症の ^{111}In oxine platelet による検討

中村 立子	前田 尚利	松下 照雄
柴田登志也	山下 敬司	浜中大三郎
小鳥 輝男	石井 靖	(福井医大・放)
堂前 尚親	津谷 寛	吉村 輝夫
		(同・一内)
真野 和夫		(同・二内)

インビトロで In-oxine による血小板の標識を行い、本態性柴斑性血小板減少症 (ITP) の血小板寿命測定およびイメージングを行った。

患者からの血液 50 ml を血小板分離し、 ^{111}In oxine 2 mCi で標識した。標識率は 2~3 万/ μl 程度の血小板数でも 30% 以上の標識率を得ることができた。標識された血小板を患者に戻し、以降一定時間ごと約4日にわ

たって採血し、その放射能の変化を測定し、血小板の血中 kinetics 算出の対象とした。

検査は、ITP の4例について行い、その T1/2 はそれぞれ、10.5 hr, 7.5 hr, 2 day, 6.3 hr であり、明らかなその間の短縮を認めた (正常値: 4~5 日)。2例については脾摘が行われ、脾摘後の T1/2 は、2 day から、4.8 day, 6.3 hr から 4.4 day と、延長を見た。24 hr 後のシンチグラフィにおいて、肝・脾に強い集積を認めた。

In-oxine 2 mCi を用いた血小板寿命測定の有用性として、血小板寿命の測定ができること、治療による効果を予測評価できること、血小板の破壊場所をガンマカメラによりディテクト可能なので血栓探策もできることなど考えられる。

血小板寿命の短い例における測定では、2つのコンボ一メントがあり、正常例との対比の上で今後の検討が必要と思われる。

22. ^{111}In -oxine 血小板、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -fibrinogen による血栓の検出

鈴木 雅雄	今枝 孟義	梶浦 雄一
関 松蔵	石川 勉	広田 敬一
浅田 修市	又吉 純一	山脇 義晴
国枝 武俊	松井 英介	柴山 磨樹
土井 偉誉		(岐阜大・放)
加藤 敏光		(岐阜市民病院・放)
三宅 浩		(県立岐阜病院・放)
常田 昌弘	松永 隆信	(岐阜大・整)
飯田 辰美	松本 興治	稲田 潔
		(同・一外)

血栓症の診断においては、臨床所見が重視されてきたが、近年発展した各種画像診断により、早期診断がなされるようになってきた。今回、われわれは、 ^{111}In -oxine 血小板シンチグラフィ (^{111}In -血小板) 48 症例、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -fibrinogen シンチグラフィ ($^{99\text{m}}\text{Tc}$ -F) 30 症例における血栓の検出について検討した。(1) ^{111}In -血小板は外科的に確認した心大血管系の血栓7例中、完全に器質化した血栓であった1例が陰性であっただけで、残り6例はいずれも描出された。(2) 外科的に確認した左房内血栓2例において、 ^{111}In -血小板では2例とも描出されたが、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -F では2例とも陰性であった。(3) 血管外科術後の ^{111}In -血小板の陽性出現は、術後10日以降で高くなった。(4) 深部静脈血栓症 (DVT) 20 例において $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -F